

献 辞

経済学部長 清 野 良 榮

この度、高橋久弥教授がめでたく御退任を迎えられました。昭和37年(1962年)に九州大学から松山商科大学経済学部兼経営学部(当時)に専任講師として赴任され、以来38年間にわたり本学学生の教育に携わってきました。先生の薫陶を受けた卒業生のなかには、各界の中心的リーダーになって活躍されている方も多いと聞いております。

先生の御専門は「金融論」であります。九州大学経済学部は信用・金融論研究のメッカでもあり、西南学派と称される所以でもあります。その伝統は今日でも健在であります。先生はそこで故岡橋保門下生として研究者としての道を選択するにいたったわけであります。研究業績一覧にあります、論文「南北戦争時における『グリーンボックス・インフレーション』の検討」は現在でも貨幣信用理論研究者の間で高い評価を受け、度々引用されている基本文献の一つであります。

高橋教授のもう一つの研究課題は、地域経済論であり少子化・高齢化社会が猛スピードで進行しているこの愛媛の社会に生きて、地域社会を住民の立場からいかに改革すべきなのかを解明することにあります。地域社会のゆくすえを案じる氏のヒューマニズムの現れと理解したい。『戦後における愛媛県行財政の展開過程(1)、(2)』という詳細な研究冊子に集約されているのは、その精神の発現でありましょう。

先生は、研究者として研究室に隠る、換言すればデスクワークに沈潜することをとくに忌み嫌いました。絶えず社会の動向に目を向け、時代の変化を先取りしようとする鋭い現実感覚に富んでおられました。愛媛県自治体問題研究所の理事長という重責を長期にわたって果たされていることも、現実問題と格闘

しないのは研究者，さらには教育者たる資格がないと言われているようで刺激に富む生き方であると考えます。

近年の若い研究者は、「業績主義」という狭い世界に埋没し，見た目のきれいな方程式で論文を飾る傾向にあります。先生の御立場からすれば笑止千万のことと推察します。

学内の行政職としましては，1981年から2年間経済学部長また，1994年から2年間松山大学大学院経済学研究科長の要職を歴任され，松山大学経済学部の発展に貢献されました。

最後に，最終講義をするように何度も依頼しましたが，頑強に固辞されました。これもまた高橋教授の性格であろうと了解しております。願わくは，今後は人生の先輩としてわれわれ若輩者を社会の目から叱咤激励して頂ければ幸甚に存じます。先生，お元気で。